

武蔵野日曜聖書講筵

原始福音

——マタイ伝第5章1～12節、他——

1993年12月5日

小池辰雄

歴史的意味の無教会 聖霊の愛 十字架の土台あつての聖霊 砕けの神学 聖霊のパプテスマ
使徒的信仰、原始の福音 武蔵野幕屋 キリストは宇宙的な存在 八恵福

【マタイ5】

- 1 イエス群衆を見て、山にのぼり、座し給えば、弟子たち御許にきたる。
- 2 イエス口をひらき、教えて言いたもう、
- 3 幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり。
- 4 幸福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。
- 5 幸福なるかな、柔和なる者、その人は地を嗣がらん。
- 6 幸福なるかな、義に飢え渴く者、その人は飽くことを得ん。
- 7 幸福なるかな、憐憫ある者、その人は憐憫を得ん。
- 8 幸福なるかな、心の清き者、その人は神を見ん。
- 9 幸福なるかな、平和ならしむる者、その人は神の子と称えられん。
- 10 幸福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。
- 11 我がために、人なんじらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言うときは、汝ら幸福なり。
- 12 喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。

【ルカ】

49 我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。50 されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。

【イザヤ】

5 彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰をうけてわれらに平安をあたう。そのうたれし瘡によりてわれらは癒されたり。



● 歴史的意味の無教会

「原始福音」と題しましたが、私の信仰上の無二の信友が手島郁郎(1910～1973)です。この人は私よりも6年ばかり歳が若い人で、熊本の方です。長崎の商業学校を出られた人です。この人と私の関係は語らざるを得ない。

無教会の流れで、私は藤井武先生の弟子ですが、手島君は塚本虎二先生のお弟子さんです。藤井先生と塚本先生は内村先生の高弟で、これがまた親友で、住所も桜新町の、呼べば答えるような近くにお互いに住んでいた。私は東大の学生でしたが藤井先生の集会に——家庭的なこういう集会です——ごよつかいになった。その時に家内の順子もいたわけですが。

塚本先生は丸の内二、三百人くらいの大集会をやっておられた。藤井先生が亡くなったあとで、私は塚本先生の集会に出かけて行って、司会なんかもさせられました。塚本先生は手島さんの懇請によつてよく九州に出かけて行って、集会をしたことがあった。

いわゆる内村鑑三先生のグループは無教会です。内村先生が、教会の無い人たちを集めて伝道を始めたので、その時に内村先生が

「無教会」

ということを言いました。けれども、「無教会」といったつて、集団は持っているわけです。内村先生の頃は多い時はやはり三百人くらいなつたでしょうね。

歴史的意味で「無教会」という。けれども、「無教会」という言葉をいつまでも続けているのは実はおかしい。キリストのエクレシアというものはいろいろな形があつても、みなこれは一つの教会です。

「エクレシア」

というのは、

「呼び出された人たちの群れ」

ということ。無教会」という言い方が実はおかしいのだから、いつまでも「無教会」という言い方をしない方がいい。相変わらず無教会の流れは今でもあちらこちらに在る。

私のは無の教会、というので、「無教会」ではない。己無き者にされているところのエクレシア、これは無の教会なんです。

「幕屋」

とは、創世記から黙示録まで神さまの信仰の人たちの群れが幕屋でもつて旅をしながら、神の歴史をそれぞれの分野で担当してきた。歴史的な意味です。

「ついに神の幕屋が歴史の終りにできる」

ということ。黙示録にも書いてあるとおりです。「幕屋」というのは素晴らしい言葉です。旅をして歩いて行く姿を幕屋という。テントを張ったり、畳んだりして進んでいく。イスラエルの出エジプトの旅の姿です。



● 聖霊の愛

とにかく、無教会は観念的だからダメだというので、手島さんと意気投合して、

「聖霊の本当に働いているキリストの直弟子たちの次元に、原始に帰らなければい

かん、原始に戻れ」

ということを私が言いだした。それで、

「原始福音」

という。手島君と私は、そういう意味においていわゆる無教会に対して反旗を翻して、始めたわけです。だから、手島さんは私にとって無二の信友であり、意気投合して戦ってきたわけです。

ただ、私は学校の先生をしているものですから、私の伝道は片手間で伸びない。手島さんは棄身の態勢でやりましたから、どんどん伸びていったわけです。ところが、手島さんは肝硬変で仆れた。本当は惜しい人です、もつと生きてもらいたかった。けれども、非常に本来、霊的な素質の人で、

「聖霊の愛」

ということを彼が言いだした。「聖霊の愛」という素晴らしい言葉と、またその現実です。

無教会は、内村鑑三の流れはどうも冷たい。本当の愛が何か欠けている。むしろ教会の人たちの方が愛がある。無教会はどうも愛が欠けている。聖書の研究ばかりして、交わりの世界が何となく欠けている。

ところが、手島さんは非常に聖霊の愛ということを唱道して、彼らのグループは本当に暖かい。みな愛をもつて交わって助け合って、大変美しいところがあります。

無教会は何となく、性格的にどうも愛が足りない。義の方がつよい。だから、ひよつとすると、信仰の批判的になる。ひとの信仰を批判してはいかん。

手島さんは「聖霊の愛」ということを力強く言いだした。そして事実、そのような群れが展開していった。私はもちろんそういう意味で共感してますから、手島さんは私のものは本当に喜んで読みました。彼は非常に丁寧な手紙をよくよこしました。百通くらいある。

「小池先生がなければ、私は…」

という言い方をしているところが所々にある。そういう意味で、私は手島さんとは無二の信友であった。「十字架の土台」ということをはつきり言っているのはむしろ私の方ですけれども。

● 十字架の土台あつての聖霊

十字架の土台なくしては、本当の聖霊ではなくなる。ルカ伝12章49節で、キリスト自身がそう言つてらつしやるんだから、しようがない。

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて来^{きた}れり。」



「火」というのは聖霊の火のことです。

此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

「聖霊が燃えたらもう望むものはない」

という。

50 されど我には受くべきバプテスマあり。

とは十字架のことなんです。

「まず十字架に架かって贖罪をしなければ、聖霊の火を灯すわけにはいかないんだ」ということ。

その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。」(ルカ12・49～50)

「十字架に自分が架かって贖罪をしたら、そうしたら聖霊がくるぞ」

ということです。だから、

「十字架無しの聖霊というものではない」

ということが、キリストのこの言葉で分かる。ルカ伝12章49、50節は非常に大事な言葉です。

「贖罪の十字架を通じて初めて今度は聖霊が来るんだ。それでなければ、火を地に

投ずることができない」

とはつきり、キリストが十字架の土台あつての聖霊のことを言つてらつしやるわけです。案外このことにみな気が付いていない。

● 砕けの神学

とかくすると、手島さんのグループの人は聖霊のことを強調するけれども、十字架のことを余り言わないということとは、キリストのこの言葉をはつきり受けとることが薄い。手島さんは聖霊の方に強く主張して、実際そのような霊的な活動をして、大いに展開した人ですから結構なことなんです、構造としてはこの十字架がない。

十字架の大事なことは、イザヤが既に預言している。イザヤ書53章、

「⁵彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために砕かれ、みずから懲罰をうけてわれらに平安をあたう。そのうたれし瘡によりてわれらは癒されたり。」(イザヤ53・5)

とある。

「彼こそはわれらの不義のために傷つけられ、われらの愆のために砕かれ、みずから懲罰をうけてわれらに平安をあたう。そのうたれし瘡によりてわれらは癒されたり。」

と。ここで大事な字はこの「砕かれ」という言葉です。北森さんが

「神の痛みの神学」

ということを言ったが、私は



「砕けの神学」
 ということを言った。

「痛み、ただけではダメなんだ。キリストの十字架の砕けが大事だ。十字架でキリストは砕かれた。そして我々の罪を贖った。それが土台で、今度は聖霊がくる。そういう構造になっている」

と。だから、キリストがルカ伝12章でおっしゃっていることは、このイザヤ書53章5節の預言を実際に身をもってなされた。「砕けの神学」というのは、十字架を「砕け」という言葉でもって第三イザヤが言っていた。

無教会に対して新しい流れを、私と手島さんで展開しはじめた。

「聖霊の愛」

ということをはっきり言ったのは手島さんですが、無教会は愛が欠けている。キリストの直弟子たちの世界はもつと愛の深い世界であったということ、その点では彼らのグループはなかなか愛が厚いですから、大変結構なんです、それは手島さんが聖霊の愛ということを強調したから。『聖霊の愛』という本もある。

それが本当の原始福音である。「原始福音」というのは即ち使徒たちの信交の世界です。

●聖霊のバプテスマ

1950年の晩秋、11月3日から5日にかけて、阿蘇の垂玉温泉たるたまの瀧見荘たきみという所で集会をした。これが私にとってペンテコステ的集会であった。私は講義をしたり、祈ったりした。手島さんもやりました。私を特にお客さんとして講師に呼んだのですから、私の方がたくさんしゃべった。

その祈祷会の時に、私はみ霊に撃たれて、痺れてしまって、そこにぶつ倒れた。

「ああ、これが聖霊のバプテスマだなあ！」

ということを初めて経験した。いわゆる無教会時代には私はそういうことがなかった。全身痺れたから、自分でびっくりした。私にとってはこれが正にペンテコステ——使徒行伝2章のところの聖霊降臨——でした。その時の祈祷会では、女の方が20人くらい居ましたが、これが期せずして霊歌を歌いだした。それは同じような調子でリズムをなしていた。あんなことは前にも後にもおそろく無かつたのではないかな。その響きは実にうるわしかった。手島さんもびっくりしていた。大変な集会でした。霊歌というのは言葉ではない。或るひとつの音楽的な響きです。

「異言」のことも手島さんが言いだしたけれども、

「それは大事なことだ」

ということをはっきり彼に言ったのは私一人でした。私は経験はなかつたけれども、これはパウロが言っているから、それを手島さんが体験したので、



「その通りだ」
と言ったわけです。

パウロは大変なものです。キリストの弟子の中でパウロは本当に多角的、多次元的なものを持っている。パウロがなかったら、新約聖書の大事どころが無くなってしまふ。ヨハネだけではダメなんだ。とにかく、パウロ、ヨハネ、ペテロは選びの器ですけども、特にパウロは大事ななんだ。

そのパウロは実は、始めはユダヤ教で、キリストに反抗していた。ユダヤ教で反抗して、キリストを信ずる者を迫害していた。そしたら、復活のキリストに、

「パウロ、パウロ、なんぞ我を迫害するか！」

と、やつつけられて、ダマスコ途上でパウロ自身がひっくり返ってしまった。彼自身が復活のキリストにひっくり返されて、三日三晩目が見えず、ものが食べられず、そういう状態に陥った。あれがパウロの驚くべきペンテコステだった。

この聖霊がきたら、もう楽しくてしょうがない。だから、くすぶってなんかいられない。皆さんがもし、くすぶっていたら、聖霊がおかしくなっている。この聖霊の世界というのは、どんな環境でも、どんな生活状態になろうとも、そういうことを乗り越えているところの驚くべき生命的な、喜びの状況ですから。絶対に負けない。

この集会は小さいけれども、そういう聖霊の群れです。一人ひとりが是非ともそのような一騎当千の人で、

「十字架・聖霊」

において、どしどし体験を深くしていただきたいと思っています。

●使徒的信仰、原始の福音

とにかく、使徒的な信仰の、原始の福音の次元の友達を手島さんの他にいませんでした。無教会に学者はたくさんいるが、聖書は研究ではない。身体で読む。身読しんどくです。無教会の流れで、手島君と私は全く別な二人です。他に胸襟きょうしんを開いて語れるような人はいなかった。

手島さんと熊本の北にある花岡山という所へ行つて、二人で一時間ばかり日本のために祈ったことを覚えています。人間的には大分性格が違う人だけでも、しかし、十字架・聖霊のこの事態においては大いに意気投合しました。

「砕け」が十字架なんです。十字架をお留守にして、いくら

「聖霊、聖霊」

と言ったって、そんな聖霊はヘタすると悪霊に変わってしまうから、サタンに切り替えられてしまうから気をつけなくてはいいかん。絶対に十字架が土台になっていなければダメです。

手島さんが亡くなった時に、



『生命の光』という雑誌をやめようか』
 という。今までの無教会はみなそうなんです。先生が亡くなると、その雑誌は廃刊になる。弟子達が私のところに来て、

「手島先生が亡くなったので、『生命の光』はやめようかと思つていますが、どうでしょうか？」
 と訊いたから、

「何を言っているか。これは聖霊の雑誌だ。手島さんが亡くなったからといって、君たちは跡を続ける義務がある。聖霊の雑誌をやめることがあるか」

と私ははつきり言つてやった。

聖霊の業は、私が向こう側にいこうが、皆さんそれぞれが——どういう形でもいい——展開していかなくては。数人集まっても、何でもいいから。せざるを得ない。義務ではない。展開せざるを得ない。聖霊が無くなったら、本当の意味で生命がなくなる。キリストの直弟子の次元の、聖霊の素晴らしきというものが一般には受けとられていない。

「自分の信仰がどうだ、実存が、生活がどうだ、聖書の研究の仕方がどうだ」
 なんて、そんなことを問題にしたつてダメだ。そんなものはみな二義的なものだ。第一義的なことは、

「本当に十字架土台の聖霊が生きているか、聖霊の人になっているか」
 と。それだけが一番大事なものだ。

「キリストと一つとなつているか」
 それだけが問題だ。

「聖書の研究、自分の信仰がどうだ」
 なんていうことをゴタゴタ考える必要はひとつもない。「おのれ」なんか問題にしてない。問題は、

「キリストを本当に生きるかどうか」
 です。キリストが生きていかなかったら、キリストと一つになっていなかったら、自分だつて力がなくなるから、自分で分かる。私は疲れをしらない。眠くはなるけれども、

「ああ疲れた」

なんて思うことはない。

●武蔵野幕屋

武蔵野幕屋の方は、女の方であろうと男の人であろうと、そういう烈々たる魂で進んでくださいよ。そしたら、あなた方は為すこととみな凄い力が出てくるから。また、新しい創造的なものが出てくるから。そんな気持で私は今、詩も書いてるわけだ。

福音の世界は人物を通して展開していく。人物の数珠の玉みたいに。福音は具体的に人



から人へと人格を通して、存在を通して伝わっていく。頭で書かれたもので伝わるのではない。聖書を読んでも、パウロを読めば、パウロという人物と一つになって進んでいく。

「パウロは何を言ったか？」

なんていう、ただ意味ではない。意味の世界ではない。

聖書は人格的ぶつかり合いの、火花の散るような読み方をしないとね。いわんや、福音書になったら、キリストに降参しながら歩いていくと、キリストの中に入りますから。キリストに降参しながら、

「参りました！」

と、そうするとキリストの中に入っていく。

教育というのは、教えるのではない。自分を本当に告白していく。自分をさらけ出して告白していると、相手に響く。教え込もうという意識はダメです。だから、私は「教育」の教の字は嫌いなんだ。

「キリスト教」

の教も嫌いだ。道なんだ。みな一人ひとりが歩かなければダメです。

「キリスト道」

です。

「我は道なり」

という。一人ひとりが歩いている。一緒に歩いたら楽しいよ。教えられたら、聞くのが嫌になっちゃいます。「キリスト教」という言い方が本当は間違いだ。「キリスト道」です。禅の世界でもそうでしょ。禅道だ。

●キリストは宇宙的な存在

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声きけば生まれぬ先の父ぞ恋しき（父をしぞ思う）」

鳥からすはまつ黒だから、闇の夜ではなおさら分からない。しかも、鳴かない鳥の声がきければ、

「生まれぬ先の父ぞ恋しき」

という。

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声きけば」

と、そういう神秘的な境地なんです。そういう神秘性というものを信仰の世界ではもたないとダメなんです。これは一休和尚の歌です。

禅宗であろうと、浄土宗であろうと、浄土真宗であろうと、一流の坊さんはみなそういうつた次元を持っている。いい加減な註解書なんかを読むよりも、偉大な仏道の僧侶の伝記を読んだ方がよほどためになる。

私の詩の中にはそういうのがたくさん出てくる。

「これは福音かと思つたら、だいぶ仏教のことが書いてあるな」



なんて。「仏教のことが書いてあるな」ではない。本当の世界は、仏道であろうとキリスト道であろうと、共通のものが響いている。そういうことが普通のキリスト教徒には分からん。限定しているから。

イエス・キリストは宇宙的な存在ですから、仏道であろうとマホメット教であろうと何であろうと、本ものは全部これを包んでしまう、包摂してしまう。全部、キリストの中に入ってしまう、老子であろうと孔子であろうと。およそ真理は全部、キリストの福音の中に入ってしまう。本当にキリストを知ると、老子を読んでも孔子を読んでも、おろしろい。キリストの光で読めるから。

私はキリストの無者です。キリスト自身が無者です、神さま一切だから。神一切で、父が一切で、

「自分は何もできない、何も言えない。父なる神にやらせられている、言わせられている」

と、キリスト自身がヨハネ伝で言っている。だから、キリストは無者なんです。無者というのはい、無限無量者なんです。無者、即無限無量者。だから、

「我を見しものは父を見しなり」という。

「私は何もできない、何も言えない」

と言った者が、

「私を見た者は神さまを見た」

と言った。ゼロのところ無限無量なものが入ってくる。我々は自分をさらけ出していると、キリストが入ってくる。キリストは、

「我と父とは一つなり」

とおっしゃったが、我々は、

「我とキリストとは一つなり」

と、はつきり言えなければ、本当の信交ではない。

私は、「しんこう」は「信仰」とは書かない。

「信交」「神交」

と書く。キリストと一つになって一如の世界に、キリストと霊的な交わりの世界に入りますから、私は「仰」は「交」と書く。

我々は大事なことを聖霊の導きで語りまた聞いているわけです。これが本当の原始福音なんです。

自分の信仰とか自分の教派のもので、イエス・キリストという無限無量なものをみな限定している。それではダメです。キリストに限定されるのならいいけれども、キリストを限定している。妙な教派根性でどうだこうだと言っている。そんな相対的な比較をしてい



る世界ではない。

イザヤ書の「砕け」から、砕けの十字架から、火の聖霊、これはキリスト自身の聖言によって、また彼の十字架と聖霊を送られたことによって、事実が証明しているわけです。

聖書はどこを読んでも楽しいから、大いに読んでくださいよ。そういう角度で、そういうみ光で読むと、

「いや、こんなことがあつたか」

なんて、旧約でも随分素晴らしい言葉がありますから。何ととっても、聖書そのものは、創世記から黙示録まで聖霊の力で、聖霊の光で書かれた本です。

「聖書の思想」

なんてよく言うけれども、聖書は思想ではない。思っている世界ではない。聖書は告白の書なんです。文学でもゲートルは、

「私の文学は全部、告白である」

と言った。さすがはゲートルです。頭で書いているのではない。体験からものを言っている。体験から詩を書いている。だから力がある。そういう意味では、漱石もとてもゲートルの元にはかなわない。ゲートルは聖書を身読した人だから。

福音の世界は楽しい。楽しくなかつたら福音ではない。

●八恵福

マタイ伝5章1～12節は「八恵福」という。「幸福なるかな」ではなく、

「恵まれたるかな」

です。幸せではなく、恵みが大事なんです。

キリストは山に登ってそこで坐って弟子たちに言われた。

「³恵福なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり。

この第一言は素晴らしい。

「恵福なるかな、霊の貧しき者」

「霊の貧しい」とは、

「自分を何者ともしない、自分をゼロに置いている人」

それが「霊の貧しき者」です。「心」と書いてあるが、これは「心」ではなく「霊」です。

「天国はその人のものなり」

霊が貧しいと、「天国」とは

「天国体キリスト」

のこと。

「私はお前のものだぞ。お前と一つだぞ」

ということ。私は、「天国」は「キリスト」と読む。



4 恵福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。
5 恵福なるかな、柔和なる者……。

6 恵福なるかな、義に飢え渴く者……。

7 恵福なるかな、憐れみある者……。

8 恵福なるかな、心の清き者……。

9 恵福なるかな、平和ならしむる者……。

10 恵福なるかな、義のために責められたる者……。

11 わが為^にに人々はいろいろなことを言うけれども、お前たちは本当は恵福なのだ、恵まれているのだ。

12 喜べ、喜べ、天にて汝らの報いは大いなり、預言者たちもそうだった。大いに喜べ。」(マタイ5・3～12)

と。楽しいね、このキリストは。

この八つの相はみな恵まれた人だ。悲しんでいても

「恵まれている」

という。

「キリストの喜びが逆に満ちるぞ」

というわけです。だから、どんな状況にあつても、それはキリストにあつては全部、勝利する。全部、喜びの世界に入る。

我々の生活はいかなる状況にあつても、神讚美でなくてはいかん。神讚美ならざるを得ない。そうでなければ、力がこない。グズグズいろいろなことに愚痴をこぼしているうちはダメです。愚痴はひとつもいらぬ。どういう病いにあるうが、どういう状態にあるうが、そこで聖霊の力で我々は本当に勝つていかなければならぬ。

「恵福なるかな」が八つある。

「恵福八相」

という。どれかに必ず当たるくらいに書いてある。キリストというひとはちゃんとこういう、と。福音書のキリストは何といても凄い。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ。マタイは特にキリストの凄い言葉。マルコは凄い行為。ルカはキリストの深い心。ヨハネはキリストの霊的な力。ちゃんと、そういう特色を持っている。聖書一卷にかなう本はない。これは人間の思想ではないから。啓示の書だから。力ある、光ある、愛ある、生命ある啓示の書だから。「聖書」なんて、「聖」の字を書くものだから、何かかこまってしまうが、何か他にいい言葉はないかな。私は

「神の大ドラマ」

なんて言うんだけど。聖書は「光愛大文学」とでも書くかな。

